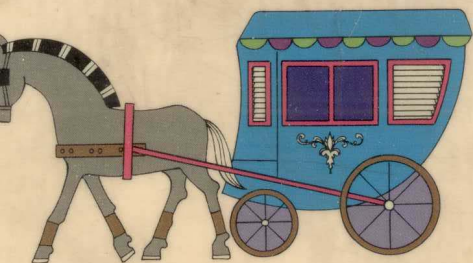
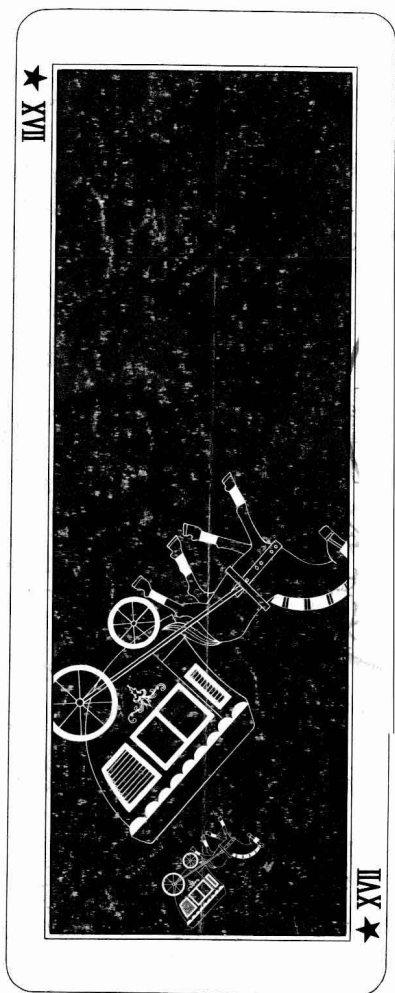


星 新一

かぼちゃの馬車
夜のかくれんぼ



かぼちゃの馬車 夜のかくれんぼ



かぼちゃの馬車
夜のかくれんぼ
(星新一の作品集 XVII)

定価 800円

印刷 昭和50年10月20日

発行 昭和50年10月25日

著者 星 新一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒162 東京都新宿区矢来町71

振替 東京4—808

電話 業務部 (03)266-5111 編集部 (03)266-5411

印刷所 株式会社 光 邦

製本所 株式会社 大進堂

© Shinichi Hoshi, 1975 Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

星くずのかご

No.17

新潮社



昭和四十八年晴海埠頭にて・著者

読書遍歴

星・新一

この作品集も終りに近づいてきた。作品集の刊行にあたってカタログに「著者の言葉」として、私はこんな文を書いた。

「なにが楽しくて生きているのか」

そう聞かれると、私は昔こう答えていた。

「どこか普通とちがった妙な小説にめぐりあり、そのひとときが楽しくてね」

といった思いであれこれ読みあさっていたわけだが、いつのまにか書くほうの側にまわってしまった。そして、世の中には私のような好みと性格を持つ読者もいるのではないかと信じながら、ひとつひとつ作品を書きつけてきた。

読書遍歴はと聞かれると、かつて読んだことのある古典の名作長編をいくつかあげてしまう。しかし、それはおさなりなような気がしてならない。それらが作家としてのいまの私に、どれだけ影響をおよぼしているだろう。ほとんどないのではなからうか。私のいう「妙な小説」とはなにか。それらについて書いてみることにする。

芥川の短編を読んだのは、中学生の時の教科書によってだった。志賀直哉の「小僧の神様」もそうだったようだ。O・ヘンリーの短編集を読んだのは、いつだったろうか。古典的な長編というやつは別次元の作品という印象を受けるが、こういう短編となると、手のとどく範囲という親しみからか、うまいものだなあという実感がわいてくるのである。

終戦後、二十歳ぐらいだったころ、私は太宰治に熱中した。青春期に特有の現象というわけだろうが、いま考えてみると、あの空前絶後ともいえるべき独特な文体が魅力だったようである。日本文の極限をとらえた作家。文章だけが存在している。だから「走れメロス」や「斜陽」のようなストーリーのある作品はあまり好きでない。

太宰が死に、その亜流もあらわれてくれず、私はふたたびストーリーが面白く完結した作品を求めはじめた。月に二十冊ほどの雑誌を読んだ。よくもそんなと思うが、当時はテレビがなかったのだ。だが、これはというものは、あまりなかった。ぜんぜんではない。「新潮」にのった五味康祐の「喪神」には感心させられた。そのほか、あげればいくつがある。

やがて『寶石』にのっている翻訳短編に私の気に入るのがあることを知った。江戸川乱歩さんが「奇妙な味」と名づけたタイプのものである。最初に読んだのは、題名は忘

れたが、ジョン・コリアの作品だったようだ。ある友人からモリス・ルヴェルという作家がいいぞと教えられたりもした。物語にくふうがこらされ、読んだあとにもなにかが残るという作風である。

そのうち、ジェイコブスの「猿の手」やサキの「開いた窓」を読むに及んで、うつつうならされた。こういう形式の小説があったのかという思いだった。それから、アンブローズ・ビアスだのシュヘルヴィエルだのの短編集を買ったり借りたりして読んだ。

そして、ブラッドベリの作品にめぐりあった。SFではあるが、デリケートという点で、太宰治を思わせるところがあった。訳者が女性だったせいかもしれない。それとほとんど同時に、SF短編の名手シェクリイの短編集を読んだ。新鮮で独創的で、これまた驚きだった。この二人の作家を知ったことが、私を文筆の道に進ませた。

つづいて、フレドリック・ブラウンを知る。ショート・ショートを多く書いている点では私の大先輩といえる。秀作も多いが、作風は私とだいぶちがう。その差異については、いづれ論じる機会もあるだろう。ロアルド・ダールがわが国で注目されたのもそのころであった。しかし、みながあまり「ダール、ダール」ともてはやすので、私のあまのじゃくな性格が反応し、さほど評価する気にならなかった。熟読すると、どことなくうさくさいところがあるの

だ。とはいふものの「南から来た男」だけは文句なしの傑作である。

私がかかり影響を受けたのは、ヘンリー・スレッサー。そう深みはないが、物語の構成の名人芸的な巧みさには目をみはらされた。彼の作品の載る『ヒッチコック・マガジン』は毎号まちかねて読んだ。そのほか、ギルフォードとかリッチーとか、短編の名手たちの作品を読むことができた。アメリカにはすごい作家が多いのだなと感嘆したものだが、あとで知るところによると、米国版の本誌のバックナンバーのなかから、できのいいのから選んで翻訳していたのだった。名作ぞろいになるわけだ。やがて、それらを使い果たし、日本語版は廃刊になった。

しかし、とにかく、ある期間は『ヒッチコック』のほか『エラリー・クイーンズ・ミステリ・マガジン』『マンハント』『SFマガジン』と四種の翻訳雑誌が毎月、書店に並んだのである。読者として最も楽しかった時期だったといえる。それらによって、私はかなりの「妙な小説」に接することができた。幻想的でありながら、ストーリーの完成度の高い作品である。人間の頭はかくも奇妙な物語を作り上げられるのかと、異様な気分にはせられる。そして「なぜ私にこんな作が思い浮かばないのか」と、くやしさに歯ぎしりする。喜怒哀楽がいっぺんに味わえるわけで、生きているという実感が持てるのである。なにしろ諸外国の多

くのなかから選り抜かれた短編である。くやしがつて当然なのだが。

私のいう「妙な小説」の特徴は、主題が善悪を超越している点にある。そして、結末の多様性によって、人間という生物のふしぎな生息が浮き彫りにされている。現実に取り組むかどうかは別問題として。

それにしても、こういう分野を手がける作家が、なぜ日本に少ないのだろう。こんな疑問を抱きかけた時、川端康成の『掌の小説百篇』を読んで、ショックを受けた。感覚と構成とがみごとに結晶した名作である。とくに「心中」を最高峰として、その前後の数編は絶妙をきわめている。

そんなぐあいに、私は「妙な小説」をさがし求めつづけている。さがす苦労があるから、読後の感激も強いのかも知れない。だれかが私むきの短編リストを作ってくれたら、さぞ助かるだろうとは思ふが、そうなると感銘は薄いものになるにちがいない。

先日、ジュディス・メルル編・吉田誠一訳の『年刊SF傑作選6』を買ってきた。そのなかに「障壁」という短編があった。越えられぬ壁の両側にいる一組の男女の恋を描いた象徴的な作品で、まさに「妙な小説」。読後、ため息が出た。作者は主婦で、発表したのはこれ一編だけだという。寓話的でありながら、寓意のはっきりしない点がすばらしい。この本にはほかに二十編ほど収録されている

が、あとはなんということもなかった。私の好みではないのである。だいたい時間を浪費したわけだが「障壁」を読めただけで、満足であった。

こんな努力をして「妙な小説」をさがしつづけているうちに、一種のこつが身についてくる。この短編集のなかに目ざすものがあるかどうか、なんとなく見当がつくのである。

つい最近、仙台在住の北森彩子さんから『野の肖像』という詩集が送られてきた。土井晩翠賞を受けたかたである。思い出せないが、小学校でクラスはちがうが私と同年だったそうである。機会があったら、お会いしたいものだ。すぐに読んだものか、あとにしようか。しかし、どうもなにかありそうだ。そこで読んでみると、はたして、あった。短い散文詩である。

主人公は龍を使うという父祖伝来の術を知っている古代中国の男。しかし、龍そのものは何百年も前に絶滅し、この世にいないのだ。男は周囲の人たちの恩情で生きている。それに対し、腕をふるって感謝しようにも、それができない。

へたな紹介になってしまったが、作品はとてもいいのである。生きていてよかったという気分になれた。一般むけの作品かどうかは、なんともいえない。しかし、私はこれからも何回か読みなおし、あるいは思い出し、その味を楽

しむことになるにちがいない。ふと、あるメロディーを口ずさんでしまうように。

といったふうに、私は頭のなかでコレクションをやっているのである。ツルゲーネフの散文詩にいいのがある。ヘッセの短編にすぐく幻想的なものがある。チェホフは若いころに短いをむやみと書き、その多くはなんということもないが、ところどころに、びかりと光るのがある。などと、あれこれ点検するのは楽しい作業だし、新しくコレクションに加える価値のあるのを見つけた時は、もっとうれし。

しかし、いざ自分の執筆となると、それだけ苦痛もふえるのである。それらの名作群に挑戦しなければならないのだ。知らなければのんきなものだが、知ってしまったとなると同工異曲なものは書けない。まだ書かれていない物語を考え出さなくてはならないのだ。私が読んで楽しんだように、読者もそうあって欲しいと願いながら、締切りの迫っている目前の一作と取り組まねばならない。

私の作品を読んで人生観が変わり、発奮して成功したという人はいないだろう。正義にめざめる人もないだろう。処生の役には立たない。そんなことを期待して執筆しているのではない。ちょっとでいいから面白かったと思ってもらえ、それは生きていて作品にめぐりあえたからだと感じて下されば、作者としてこれ以上の喜びはない。

かぼちゃの馬車……………七

秘密結社……………九 高度な文明……………五

なるほど……………二 確 認……………七

虚像の姫……………四 疑 念……………六

ご 要 望……………元 常 識……………充

厳肅な儀式……………三 ナンバー・クラブ……………四

外 見……………三 若 が え り……………三

樹 ………………毛 大 転 換……………五

七人の犯罪者……………四 新しい遊び……………五

大 洪 水……………咒 子 供 の 部 屋……………七

処刑場……………二〇

治療後の経過……………二八

超能力……………二〇三

交代制……………三三

現在……………二〇五

事実……………二二六

質問と指示……………二〇七

かぼちやの馬車……………二二九

悪魔の椅子……………二二三

墓標……………二四〇

夜のかくれんぼ……………二四二

こんな時代が……………二四三

若葉の季節……………二五五

黒い服の男……………二四四

支出と収入……………二五五

ある帰郷……………二四七

自信……………二六六

有名……………二五五

未来人の家……………二五五

不吉な地点……………	一〇	幸運の未来……………	四一
いやな笑い……………	一四	殺意……………	四四
うすのろ葬礼……………	一八	背中の音……………	五三
はじめての例……………	一九	勝負……………	五七
黄色い葉……………	二〇	手……………	七一
一家心中……………	二二	金の粉……………	七九
つきまとう男たち……………	二五	幸運の公式……………	八五
出現と普及……………	二三	違和感……………	八九
ご用件は……………	三七	悪の組織……………	九三
夢のような星……………	三八	追われる男……………	九六

かぼちやの馬車・夜のかくれんぼ

秘密結社

ある日、家にやってきた友人と酒を飲みながら、エヌ氏は言った。

「退屈だなあ。いまの世の中。刺激がいっぱいありそうな感じだが、やって面白いこととなると、なんにもない」

「そうかねえ……」

「なにか面白いことを知ってそうだな」

「いや、べつに……」

「なにかありそうな口ぶりだ……」

エヌ氏は考え、思い出したように言う。

「……そうだ、どこかで聞いたぞ。きみがなにか秘密結社に入っているというわさを」

「しつ、大声を出さないでくれ。公然と話題にされたら、秘密結社といえなくなる」

「はあ、やっぱりその会員なのだな。なにか面白い遊びをやる会なんだろう。わたしも入会させてくれ」

「そんなこと言われても困るよ」

「入れてくれないのなら、きみが怪しげで危険な秘密結社の会員だと、言いふらしてやる。会社をくびになってももらないぞ」

エヌ氏はおどしたり、泣きついたりしてたのんだ。しまいには友人もごまかしきれなくなり、こう言った。

「しかたがない。きみが入会したがつていることを、会の本部に伝えておくよ。わたし個人ではきめられない。いろいろとうるさい資格審査があつたりしてね。そのうち、きみの身辺が調査されるかもしれないよ」

「それはそうだろうな」

「それから、ここが重要な点なのだが、会員になったら簡単には抜けられない。会費は安いんだ。しかし、会の秘密をもらしたり、退会しようとしたらすると、みなにひどい目にあわされる」

「それも当然だろうな。わかったよ」

「では、本部に伝えておく」

友人は帰っていった。エヌ氏の胸はときめきはじめた。どんな会で、どんな会員がいるのだろうか。うまく会員に

なれるだろうか。秘密ということがかくも魅力的とは、エヌ氏もこれまで気づかなかつた。どんな遊びにくらべても、秘密の楽しさはその上にある。資格審査で、自分は合格するだろうか。エヌ氏はおこないをつつしんで日をすごした。

ひと月ほどし、友人が来てささやいた。

「きみは合格だそうだ。これから入会の儀式的場所へ案内する。それがすむと、正式の会員に登録される」

「それはありがたい」

エヌ氏は目かくしをされ、友人の車にのせられ、どこかのビルの地下室に案内された。目かくしをとると、あやしげな神像、ロウソクの光、強い香料など、神秘的なムードがみちている。壇上の男に指示され、エヌ氏は入会の誓いをさせられた。会の方針に従い、会の秘密を守り、脱会はしない、それらに反したらどんな処罰をも受けると。

入会がみとめられた。エヌ氏はその帰り道、興奮した口調で友人に言う。

「おごそかな儀式だったな。それに気をとられて、会の方針を聞き忘れた。いったい、どんなことをやる会なのだ」

「それはだな、一日一善、健康増進、その二つだ。それを必ず実行することさ」

「なんだと。それだけなのか。ばかっている。そんな会だったら、やめたいよ」

「それを口にする、ひどい目にあうぞ」

「わからん。いったい、なにが面白くて、きみはそんな会員になつてゐるんだ」

エヌ氏の質問に、友人は答える。

「わたしだつて入るまで、こんな会とは知らなかつたのだ。しかし、面白いこともないことはない。やめたいと言うやつを、よつてたかつて、みなでいじめる時さ……」

なるほど

ある一軒の家。その日、家族たちは外出し、少年ひとりが留守番をしていた。試験の日が迫っており、勉強をしなければならなかったのだ。楽しいことではないが、仕方ない。教科書や参考書のページをめくりつつづけていた。

ふと気がつくと、家のなかに人のけはいがする。やがて、なにかの割れる激しい音がした。行ってみると、みしらぬ男がひとり、いつのまにか勝手に入ってきて、そのへんの物をこわしている。

「あなたはだれです。やめて下さい。警察を呼びますよ」

そう言ったが、男は知らん顔をし、花びんだの、置時計だのをこわしている。高価な机を持ちあげ、投げだした。それはガラス戸をぶち破って、庭へ落ちてめちやめちやになった。

少年はこわくなり、家からかけ出し、となりの家から警察へ電話した。たちまち、サイレンをひびかせて、パトロールカーが到着した。それを迎えて、少年は言う。

「ここです。あれは気がいいです。早くつかまえて下さい」

警官たちを家のなかに案内する。男はあたりに火をつけてまわっていた。火災がひろがりはじめている。もう普通の消火器では手におえない。消防車と呼ばれ、延焼だけは防げたが、ついに少年の家は全焼した。

犯人はその場で逮捕された。現行犯だから、いやもおうもない。しかし、犯人は平然としていた。

「これがパトロールカーというものか。こいつらが警官か。なるほど。あれが消防車だな」

妙なことを言うやつだった。連行され、留置場へほうりこまれても変らなかった。

「これが警察というところか。なるほど。ここが留置場という設備か。面白いものだな」

ほかの連中は、きみわるがった。反省の色はまったくなかった。警察もてこずりながら、取調べる。犯人はやったことのすべてをみとめた。

やがて裁判となる。法廷内で犯人はあたりを見まわし、

こうつぶやく。

「あれが検事というやつか。あそこにいるのが裁判官だな。そして、こっちのそばにいるのが、弁護士という職業の人というわけだな。なるほど」

裁判官は犯人に言う。

「この事件には、よくわからぬ点がある。犯行は事実になちがいないようだが、ふしぎな点が多すぎる。被告は、なにか言いたいことがあるのなら、いま申しのべていいぞ。裁判の目的は、犯行の事情を明らかにすることにもあるのだ」

犯人は言った。

「事情は簡単ですよ。調査です。地球人の日用品には、こわれやすいものが多いんですな。住居は燃えやすいとくる。おくらてますな。また、警察とか、裁判所とか、じつに奇妙な機関ですな」

「わけがわからん。なんでそんな変な気分になったのだ。住所と姓名を言いなさい」

「ベキ惑星ですよ。名前はリラリ。いい名でしょう。地球人の名のおかしさはどうです。美的な響きがない。文明の高さがちがいますからな」

検事が口を出した。

「審理に関係のないことです。被告は法廷を混乱させようとしているのです」

それを制し、裁判官は犯人に言った。好奇心を抑えられなかったのだろう。

「宇宙人だというのだな。だが、それにしては言葉がうまいではないか」

「こんな簡単な言葉、すぐにおぼえられますよ。頭の質がちがうんですな」

「この地球へ、どうやって来たのか」

「小型の円盤に乗ってですよ」

「それはどこにある。その場所を言えば、被告は宇宙人とはつきりし、無罪となる。現行の法律は、人間が対象なのだ。それ以外の生物となると、裁判にかけるわけにいかない」

「場所とは言えませんよ。それを言ったら、あなたがた、さつそく分解し、使用不能にしてしまう。低い文明の持ち主は、そうするにきまっている」

「では、ほかに、被告が、自分を宇宙人だと証明できるものでもあるか」

「この発言が証拠です。ベキ惑星人は、うそをつかない。ここの地球人はつきますか」

「頭が狂っているとしか思えない。精神鑑定の結果を知りたい。その件はどうなっているのか」

それに答えて、検事は書類を提出した。

「専門医の鑑定書がここにあります。診断によると、すべて正常です。精神錯乱のためという弁解は通用しません。だから有罪です。さきほどからの発言は、ばかばかしい、ふざけたものです。あわよくば無罪に持ちこもうとの芝居です。これを見とめたら、まねする者が続出し、世の秩序がたもてなくなる」

裁判官は弁護士に言った。

「いまの鑑定書についての、被告側の意見はなにかありますか」

「鑑定書には同意します。被告の精神は正常です。その当人が、自分は宇宙人だと主張している。だから本物の宇宙人です。その鑑定書の終りの部分をよくお読み下さい。うそ発見機を使つての報告がついています。つまり、うそをついていない……」

「なるほど。そう書かれているな」

「ですから、一刻も早く釈放し、宇宙からの来訪者にふさわしい待遇を与え、まともな歓迎や交渉をはじめるべきです。いいですか。これは全世界に関係した問題ですぞ……」

……

弁護士は熱弁をふるった。

犯人と話しあっているうちに、これは本物だ、ただごとでないと感じたからでもあった。また、依頼人の刑を軽くすることは、弁護士の使命だ。それに、ここでうまく働いておけば、将来、ベキ惑星と地球との交渉の時、いい役まわりにありつけるかもしれない。

判決は次回の法廷でときまった。

このところ大事件がなかったせい、マスコミは大きく報道し、書きたてた。宇宙人きたる。一刻も早く無罪の判決を下すべきだ。有罪にしたら、地球の恥である、と。かりに有罪となり、刑務所に入れられたら、マスコミも取材のしようがなくなってしまう。

それにおおられた世論によつてか、つぎに開かれた法廷で、犯人の釈放が決定した。

裁判官は、いまや時の人。とくいげに言った。

「判決理由だが、宇宙人に地球の法の適用はできないからである。だから、そもそも、起訴なるものが成立しないのである。視野をひろげ、大局的な立場から判断するに……」

検事側は、あきらかに不満そうな表情だった。ただちに

控訴するつもりらしい。しかし、傍聴席は、さまざまな歓声でわき立った。マスコミ関係者が多かった。

そのさわぎのなかから、ひとりの少年が飛び出した。焼かれた家の少年だった。被告にかけより、ポケットからナイフを出し、何度も何度も突きさした。まさかという油断もあり、あつというまのできごとで、とめるひまもなかった。

警官がかけつけてきて、少年に言った。

「殺人の現行犯で逮捕する」

「そんな法律があるんですか。殺人だなんて、だれが人を殺しました。ぼくの殺したのは、人ではありませんよ」

虚像の姫

むかし、あるところに王さまがいた。王さまだから、領地を持ち、領民を持ち、お城を持ち、だれにも頭を下げないでよかった。まあ、恵まれた生活ということができた。運のいいことに、ここを攻めようという国もなかった。したがって、平和がつづいていた。王さまはみちたりていた。いや、不足しているものが、ひとつだけあった。まだ王妃がなかったのだ。

「そろそろ、王妃をもらわんといかん。しかし、軽々しく結婚し、あとで後悔するようではよくない。これは慎重にしなければならぬ。美しさと気品にみちた女性でなければならぬ。なぜなら、わしは王なのだから。さて、どうしたものか……」

王さまは考え、そして、魔法使いを呼んだ。昔から森の